

〈資料紹介〉

館蔵能海寛・寺本婉雅関連資料より

講師 三宅 伸一郎
(チベット学)

大谷大学博物館の2007年夏の企画展は「チベット 求法の旅人」と題し、前半部に博物館所蔵のタンカを中心に展示しチベット仏教絵画の世界を示し、後半部に日本人初の入蔵者(チベットに入った人物)能海寛(1869-1901?)と寺本婉雅(1872-1940)という2人の先学による将来品を展示し、全体を通して参観者に、仏教の原典を求めチベットに向かった「求法」の情熱を感じてもらおうという趣旨のものであった。前半部では、「仏」「菩薩」「祖師」「女神」「護法尊」という階層からそれぞれ展示品を選び、チベット仏教パントオンの全体像を示すとともに、仏伝を描いた「物語タンカ」を展示することにより、チベット仏教絵画の豊かな世界を参観者が俯瞰できるよう、きめ細かな配慮がなされていた。チベットの風景写真も展示され、現地の雰囲気を感じさせられる会場作りが工夫されていた。常設展として、例年にない参観者数を集めたという。博物館スタッフの情熱と努力に敬意を表したい。本稿では展示品のうち、能海寛将来品から2点、寺本婉雅関連資料から1点を取りあげ、紹介したい。

1 『目連が母を利益する経』

目連が、地獄に堕ちた母親を救うという内容を持つ。紺紙金銀泥写で、第1、2葉には、彩色仏画が描かれている。1899年11月、東チベット・タルツェンド(Dar rtse mdo、打箭鑪)で能海が購入したものである。冒頭にサンスクリット語題名を掲げ、奥書にヴィデヤーカラシンハ(Vidyākaraśiṃha)とイエシェーデ(Ye shes sde)という吐蕃王国時代(～9世紀中頃)の2人による翻訳と記され、サンスクリット語からの翻訳仏典であることを主張している。しかし、現行のチベット大

蔵経に未収録であること、全28章のうち前半の5章が『宝星陀羅尼經(Phags pa 'dus pa chen po rin po che tog gi gzungs shes bya ba theg pa chen po'i mdo)』と同文であること、吐蕃王国時代の翻訳と主張しているにもかかわらず、『デンカルマ(IDan kar ma)』や『パンタンマ(Phang thang ma)』という当時の訳経目録や、ブトン(Bu ston Rin chen grub, 1290-1364)の『仏教史』(1322年)にもその経題が見られないことなどから、チベットで作成された「擬経」ではないかと思われる。そもそも目連が地獄に堕ちた母を救うという「目連救母説話」は、インドではなく、中国で成立したものである。つまり本品は、中国起源の説話の翻案である。チベットにおいて目連救母説話は、カダム派の学僧ポトパ(Po to pa Rin chen gsal, 1027-1105)の説法集『喩法(dPe chos)』に見られ、12世紀初めにはすでに知られていたものと思われる。ニンマ派の埋蔵經典発掘者グル・チョワン(Gu ru chos dbang, 1212-1270)についても、目連救母説話同様のエピソードが知られており、それは、目連救母説話を記した一小品とともに、死後の世界を見聞した蘇生者('das log)の話をもとめたシリーズの中に収められている。さらに本品と内容類似の經典はトク(sTog)やプタク(Phu brag)、モン(Mon)など写本系カンギェルに収録されている。さらに、チベットの英雄叙事詩「ケサル王物語」のうち『地獄リン大究竟(dMyal gling rdzogs pa chen po)』『アタク・ラモ(A stag lha mo)』という2つの物語は、それぞれ主人公ケサルが地獄に堕ちた母や妻を救うというものであり、目連救母説話の影響を考えねばならない。チベット仏教と中国仏教の交流という点、禪にばかり注目が集まるが、目連救母説話は、別

の側面を伝えてくれる。

なお、目連救母説話といえば『孟蘭盆経』が想起される。写本系カンギュルには法成訳の『孟蘭盆経』が存在する。そのチベット語訳の経題は、「遍く救う器 (*Yongs su skyob pa'i gnod*)」である。孟蘭盆の語源を巡っては、倒懸を意味するサンスクリットの俗語形ウランバナ (*ullambana*) の、あるいは、ソクド語で靈魂を意味するウルバン (*urvan*) の、さらには自恣を意味するサンスクリット語プラヴァーラナー (*pravāraṇa*) の変形ウラヴァーナ (*uravāṇa*) の音写であるなどの議論があるが、少なくとも法成がこの経を翻訳した9世紀前半において孟蘭盆の語は、「遍く救う器」という意味で理解されていたのであろう。孟蘭盆の語源を巡る議論に一石を投ずることになるであろう (以上、Matthew T. Kapstein, “Mulian in the Land of Snows and King Gesar in Hell: A Chinese Tale of Parental Death in Its Tibetan Transformations”, IN Cuevas, Bryan J. & Stone, Jacqueline Ilyse (eds.), *The Buddhist Dead: Practices, Discourses, Representations*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007, pp. 345-376 を参考にした)。

2 「財宝神像」

主尊は、赤色の帽子を被り馬に乗り、右手に赤い房の付いた槍を持ち、左手には胸前で宝珠の盛られた盆を持つ。「財宝神像」とは、本品に付されている付箋に記されているものである。能海の将来品には、このような付箋が付けられている。これらは彼自身によって付されたものだと考えられる。近年、能海の残した資料が影印という形で出版、公開され始めた。そのうち、『中国巡礼探検記録Ⅱ』(能海寛著作集第5巻、うしお書房新社、2007年)に、1899年11月彼がタルツェンドで作成した仏教図像集が収められている。全40点の尊格が、その名とともに図示されている。その第36に記された「赤財神」すなわち「赤槍を持つ毘沙門天 (*rNam sras mdung dmar can*)」の乗物・持物は本品の主尊と同じである。能海が本品に「財宝神」の名を与

えた根拠をここに見ることができる。しかし、「赤槍を持つ毘沙門天」と比べ、本品の主尊は、甲冑を着用していない点、弓矢を帯びる点が異なる。チベットでは各地方に、「領土神」として崇められる「ユルラ (*yul lha*)」「シダク (*gZhi bdag*)」という神々が存在している。これらの神々は山に住み、馬に乗り武器を手に持った姿であらわれ、あるいは仏教の守護神としての役割を与えられ、チベット仏教パネトンの中に組み込まれている。本品もそうしたいずれかの地方の領土神ではないかと考えられる。今後さらに検討を要す。

3 『北京版チベット大蔵経目録』

1911年から1913年にかけて作成された。寺本婉雅の直筆。カンギュルに対する目録1冊、テンギュルに対する目録2冊、計3冊からなる。第1冊目の冒頭には「西藏語大蔵経将来之顛末」と題する大蔵経将来の経緯が記されている。内題にダライ・ラマ13世(1876-1933)より寺本に与えられたトゥプテン・ソーバ (*Thub bstan bzod pa*) の名が記されている。1900年、北京版チベット大蔵経を見出し、これを日本に将来したことが寺本の名を高めた。チベット大蔵経の価値を十分理解していた彼は、まずなによりもその目録の作成こそ、己の責務と感じていたのだろう。すでに1900年の段階で北京雍和宮にて蔵漢対照の『如来大蔵経目録』(北京版カンギュルに対する目録)を作成しており、これは現在、寺本のご親族のお宅に伝わっている。トゥプテン・ソーバの名とともにチベット旅行許可書を与えられたものの、ダライ・ラマ13世の使節招聘の夢破れ、1908年帰国し、再びチベットに足を向けることなく、彼は滋賀県蒲生郡鏡山で学究生活に入ってゆく。その間に作成された本品は、インクで清書された上に鉛筆による書き込みが多数みられる。これらの書き込みは、本品が、今でもすぐれたレファランスとして名高い『甘殊爾勘同目録』へと繋がるものであったことを証している。